

現実を見ている人が、 危ない人に見える時代



現代の公共空間における「社会性の劣化」についての考察

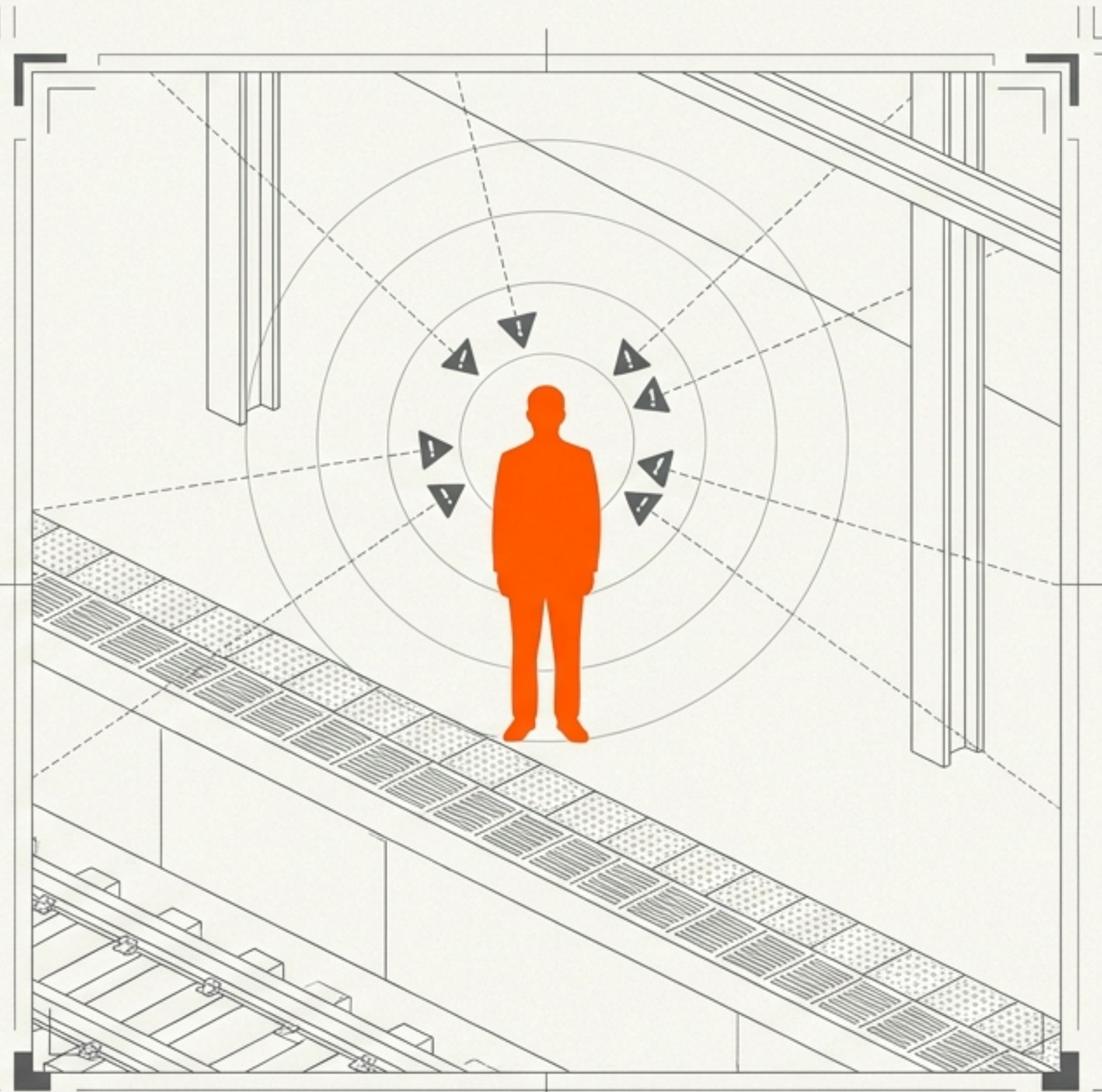
公共の場で、 前を見ているだけ。

周囲を見ている。

人の流れを見ている。

空間の違和感を拾っている。

→ それだけで、なぜか少し
「危ない人」に認識される。



この現象は、かなり気持ち悪い。

「見る」ことは危険行動ではない。安全確認である。



本来、公共空間でまともなのは「周囲を見ている人間」のはずだ。

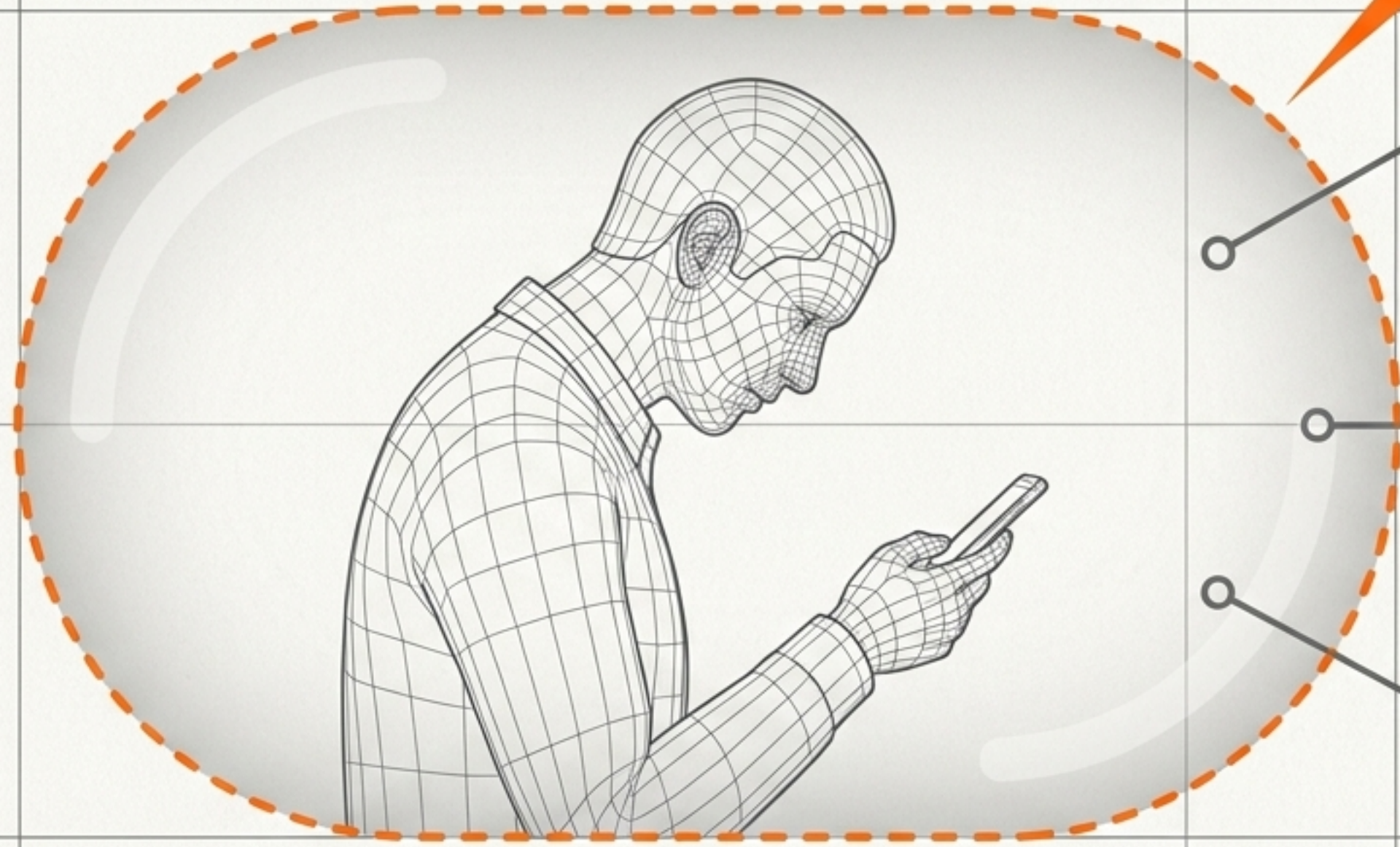
現代の公共空間における「倒錯」

スマホを見ている人	現実を見ている人
状態：画面に意識を閉じ込める	状態：現実接続・観察側に立つ
他者への影響：干渉・評価をしない (社会的に“丸い”)	他者への影響：空間の異常に気づく
社会の認識：安全・普通に見える	社会の認識：異常・怖いと感ぜられる

危険に気づかない人が普通扱いされ、
危険を見ている人が危険視される。

なぜ、下を向く人が「安心」されるのか？

無害アピール



「私はあなたを見ていません」

「私はこの場を観察していません」

「私は現実に深く関与していません」

画面への逃避が、他者に干渉しないという社会的な“丸さ”として機能している。

**狂っているのは「見ている人」ではない。
見られることに耐えられなくなった社会のほうである。**

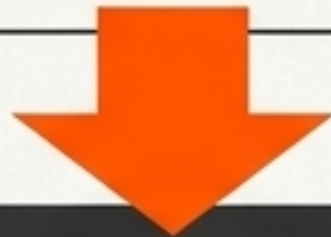
現代人は、他者に観察され、評価されることに弱い。



画面越しではない「現実の他者」の視線を恐れる。



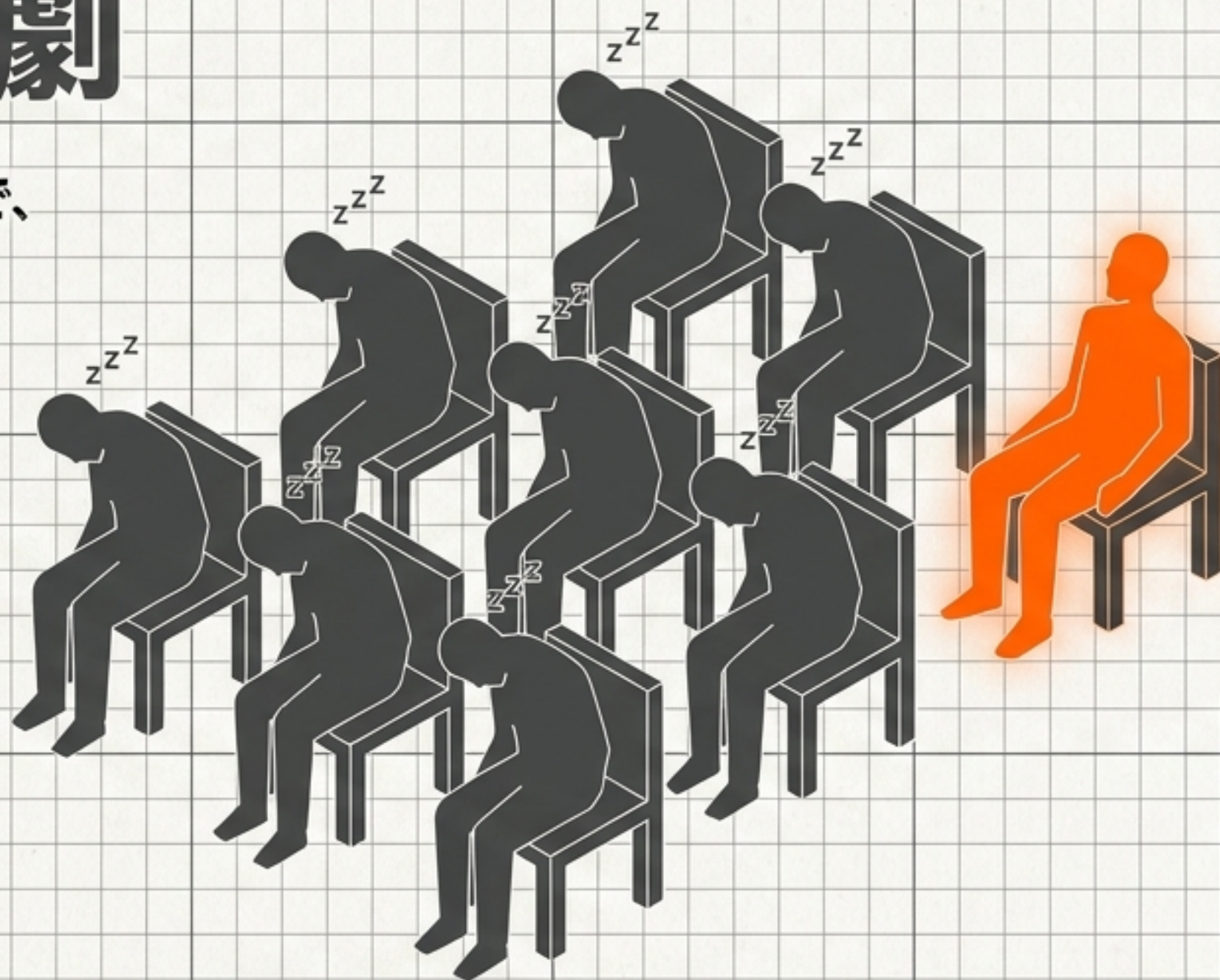
みんなと同じ「逃避姿勢」を取らない人間への違和感が生まれる。



結果、ただ現実を見ているだけで「妙な圧」を感じてしまう。

「全員が麻酔を打っている 部屋」の悲劇

全員が麻酔を打っている部屋で、
一人だけ素面の人間がいる。
そのとき、異常に見えるのは
「素面の人間」である。



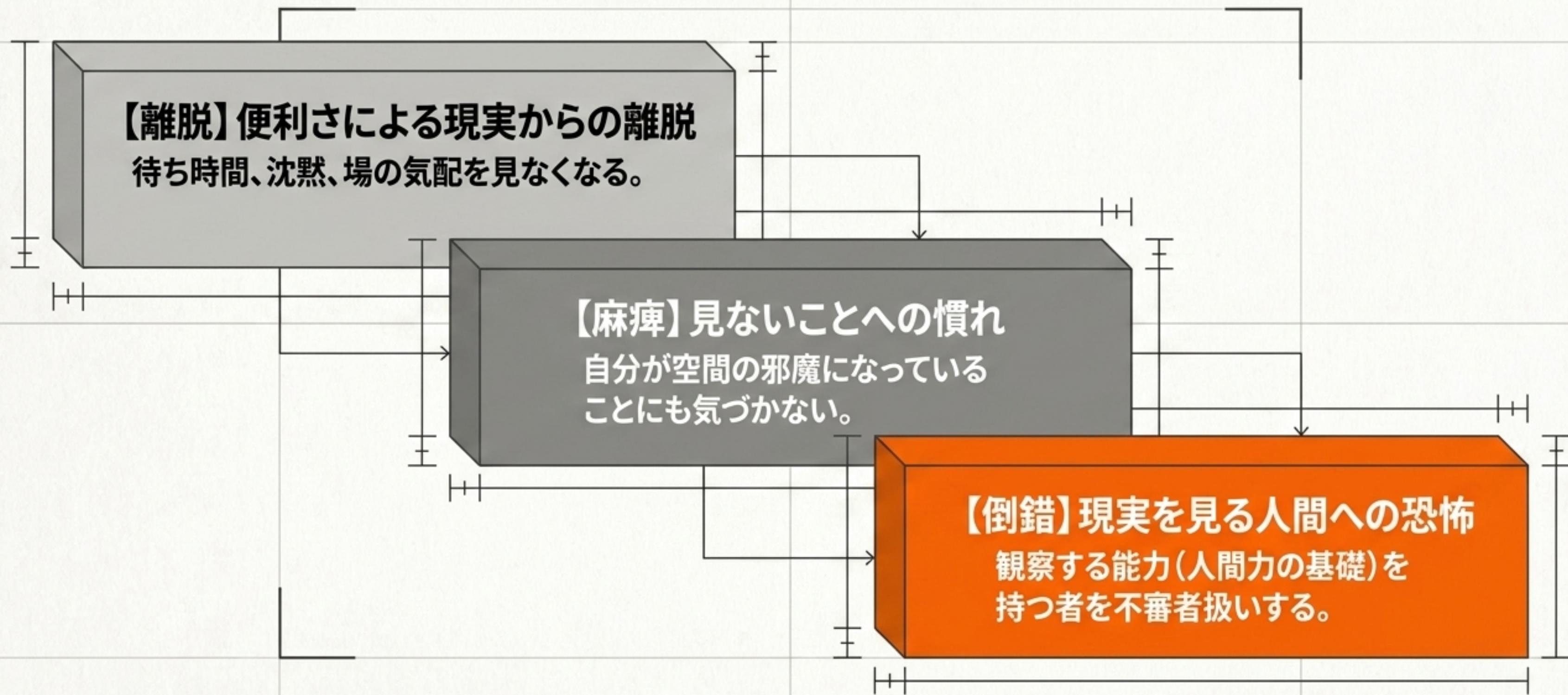
画面に逃げるのが標準化された空間では、ただ現実を見ているだけで「浮く」。しかし、本当に壊れているのはどちらか。

「他者に関与しない＝安全」という致命的な誤認



現実を見ていない人ほど「私は普通です」という顔で無自覚な加害を行う。

「社会性の劣化」へのプロセス



「場を見る能力」こそが人間としての基本動作である。

公共空間に必要なのは、画面を見る能力ではない。



人との距離・歩く速度



空間の詰まり・立ち位置



危険の気配・相手の動き



自分が場に対して
どう影響しているか

これらを読む力こそが「社会性」である。

前を見ている人を、危ない人だと思ふな。

**下を向いている自分たちのほうを疑え。
全員が下を向いていることに違和感を持て。
現実を見る力まで手放すな。**

**画面の中に逃げることを、
社会性だと勘違いしてはいけなない。**